The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とビルマ語における格助詞と副助詞の連続性
Author(s)	Thu Thu Nwe Aye
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73541
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（THU THU NWE AYE（トゥ　トゥ　ヌェ　エー））	
論文題名	日本語とビルマ語における格助詞と副助詞の連続性

論文内容の要旨

本研究の目的は、日本語とビルマ語の格助詞の中に、通常であれば、副助詞が担うような機能を有するものがあることに着目し、両言語のゼロ助詞の位置づけを含め、格助詞と副助詞がどのような関係にあるかを考察しながら、そこに見られる連続性を明らかにすることである。

本論文は、7つの章から構成されている。各章の概要は以下の通りである。

まず、第1章では、本論文の出発点となる問題の所在を明らかにし、本論文が目指す目的について述べた。また、論文全体の構成を示すとともに、ビルマ語の例文を理解する際の助けとなるよう、その言語的特徴について概説した。

第2章では、本研究を進めるにあたり重要な情報源となる、日本語及びビルマ語における格助詞と副助詞の定義や分類、用法などについて論じている先行研究を概観した。

第3章では、日本語とビルマ語における格助詞と副助詞の機能や特徴について考察した。格助詞は、それを伴う名詞が文中において動詞とどのような文法的・意味的関係にあるかを示すものであるが、副助詞は、名詞と動詞との関係を一意的に決めるためのものではない。格助詞と副助詞各々の基本的な機能は、日本語でもビルマ語でも同様であるため、日本語において指摘された生起制限は、ビルマ語にも観察される。しかし、格助詞と副助詞が連続する際、ビルマ語では「格助詞＋副助詞」の順しか許されない点は日本語と異なる。両言語の興味深い類似点として挙げられるのが、格助詞としても、副助詞としても、扱われている助詞が存在することである。日本語の「から」や「まで」、及び、ビルマ語の-ka.（奪格機能も持つ）と-ko_（向格機能を持つ）がその例である。格助詞と副助詞にまたがって存在する助詞があることだけでなく、格機能が類似していることも興味深い共通点である。ただし、ビルマ語の-ka.は主格機能も持ち、-ko_は、対格機能も持つ。それ故、ビルマ語の基本的な格助詞は、日本語よりその数が若干少なく、相対的に言って、ビルマ語の方が日本語よりも一つの格助詞が担う機能が多くなっている。それが原因で、ビルマ語では格助詞の機能を特定する際、文中の他の要素（特に動詞）に頼る比重が日本語よりも高くなり、その結果、ビルマ語の格助詞の意味的な自立性は日本語に比べると弱いと考えられることは、Thu Thu Nwe Aye(2016、2018)でも指摘した通りである。

第4章では、日本語とビルマ語におけるゼロ助詞について考察した。通常であれば、格助詞を伴うべき名詞が格助詞を伴っていない場合、格助詞の省略かゼロ助詞の生起の二つが考えられる。有形の格助詞を伴う場合と伴わない場合で意味用法に違いがない時は、省略であるが、違いがある場合は、省略ではなく、ゼロ助詞が生起していると考えられる。日本語では、「が」や「を」が無形になったとき、その名詞が主題性を帯びていることや新たな話題を提示すること等の特徴が見られる場合があることが先行研究で指摘されている。主題性というのは、格助詞の機能ではなく、「は」に見られるように副助詞の機能である。さらに、その無形は、「は」と異なり対比の意味合いも持たない。従って、それは、格助詞や副助詞の省略ではなく、音形を伴わないゼロ副助詞であると考えられる。一方、ビルマ語でも、助詞が不在になることがあるが、そこには日本語と異なる特徴が観られる。まず、ビルマ語では、有形の格助詞がある時よりもない方が通常であること、有形の助詞の有無が動詞との意味関係に左右されることから、ビルマ語では、有形の助詞がない場合、ゼロ「格」助詞がある。別の言い方をすると、有形と無形の格助詞が交替していると捉えるのが妥当である。日本語のゼロ助詞が副助詞であり、限定された意味しか持たないのに対し、ビルマ語のゼロ助詞が格助詞であり、様々な有形格助詞に代わり用いられるのは、第3章で述べたように、日本語と比べ、ビルマ語では所与の格助詞が担う機能が相対的に多く、そのような状況から派生する“自立性”も低いということとも関連しているのではないかと考えられる。

第5章では、ビルマ語における格助詞交替と副助詞の関係について考察した。日本語同様、ビルマ語でも格助詞の交替現象が観られる。両言語で類似の格交替も観察されるが、一方の言語でしか観られない格交替もある。例えば、日本語では目的語の「を」が「が」と交替することがよくあるが、ビルマ語では、通常、そのような交替は許されない。それは、対格の-ko_が向格の機能も有し、主格の-ka.が奪格の機能も有しているため、両者は方向性において逆の意味

を内在しており、それがビルマ語において両者の交替が許されない理由の一つになっていると考えられる。しかし、ある状況では、-ka.と-ko_の交替が許される場合がある。ビルマ語の助詞の-ka.と-ko_に副助詞の機能があることは従来も指摘されてきたが、-ka.-ko_や-ko_-ka.のように両者が連続したものは、格助詞と副助詞の連続ではなく、副助詞の連続であると捉えるべきであり、-ka.-ko_-ka.や-ko_-ka.-ko_のような三連続も副助詞の連続であることを本論文で指摘した。さらに、-ko_については、格助詞であるか、副助詞であるかで、初頭のkが有声化するかどうか、当該助詞が付く名詞の末尾が下降調になるかどうかに関する音声的振る舞いが異なることを明らかにした。従来も-ko_の有声化の有無が音韻的条件によって決定されることは知られていたが、それが格助詞と副助詞の区分と連動していることを明確に指摘した先行研究はない。また、下降調の有無についても、それが格助詞と副助詞の違いに起因すると明示的に指摘するものはなかった。これらの新たな知見をもとに、-ka.と-ko_の交替を見直したところ、それは格助詞同士の交替ではなく、-ka.は格助詞であるが、-ko_は格助詞ではなく副助詞であることが明らかとなった。また、日本語では「格助詞－副助詞」に加え、「副助詞－格助詞」の順も可能であるが、ビルマ語では「格助詞－副助詞」のみが可能であることも明らかとなった。さらに、副助詞の-ka.や-ko_、そして、両者の連続が様々な有形格助詞に後続するのに対し、名詞に直接後続するときは、特定の意味特性を持つ動詞としか共起できない。このような制限は、副助詞ではなく、格助詞の特性に近い。すなわち、-ka.と-ko_及びそれらの連続は、有形の格助詞に後続するときは、副助詞だと断言してもよいが、名詞に直接後続するときは、格助詞的な特性も有していることが窺える。

第6章では、副助詞との関連性を念頭に日本語とビルマ語における格助詞の体系を再考した。ビルマ語において、-ka.と-ko_は、有形の格助詞に後続する場合は、副助詞であることは明確である。しかしながら、単独で名詞に後続した際は、格助詞か副助詞のどちらであるかを断定するのは、容易ではない。助詞-ka.については、音韻的条件が整えば、必ず有声化するため、音声から判断することができない。また、主語が-ka.を伴うと強調のニュアンスが表れるが、それは副助詞の機能ではなく、ゼロ助詞と交替した主格助詞の付加的機能である可能性もある。助詞-ko_は、副助詞の場合は通常は有声化しないが、若い世代では有声化させる場合もある。さらに、格助詞の場合であっても、音韻的条件によっては有声化しない。また、単独で現れる副助詞の-ko_は、述語が状態性の動詞の主語にしか後続しないことから、格助詞的な特性も有しているように思われる。助詞-ko_は、一部の副助詞に後続することができるが、-ka.は全くできない。有声化の有無の点でも、-ka.は格助詞と副助詞で差がなく、ある意味、-ko_よりも格助詞寄りになっていると言えるだろう。助詞-ko_も、無声のままで発音しても、状態性の動詞の主語以外に後続できない点では、格助詞寄りであると言えよう。両者は、他の格助詞と共起して初めて副助詞としての機能を十分発揮できる。また、お互いに共起することで、格助詞ではなく副助詞であることを示すことができるが、単独の場合同様、名詞に直接後続する場合は、状態性の動詞の主語にしか現れることができない点では、副助詞として十分に自立しているとは言えない。日本語の場合、一見すると、格助詞と副助詞は、それぞれ形態が異なり、この2種類の助詞は明確に区分されているように思われる。しかし、先行研究では、「から」と「まで」は格助詞としても副助詞としても捉えられている。さらに、格助詞の「が」については、排他や限定といった機能を認められている。これらは、とりたて機能の一種で、「が」が副助詞的な機能を帯びることがあることを示している。第4章で考察したように、日本語のゼロ助詞はその機能から副助詞であると考えられる。しかし、主語に現れるゼロ助詞は、「は」が持つ対比的なニュアンスや「が」がもつ排他的なニュアンスを持たない。このような意味合いを持たない無標の主題を表す。つまり、とりたて機能を持たない副助詞である。「とりたて」が副助詞の代表的な機能であるなら、ゼロ助詞はもっとも副助詞らしくないとも言える。また、ゼロ助詞は、「が」と「を」（と「に」の一部）としか入れ替えることができず、他の副助詞に比べてその生起する環境が限られている。見方を変えれば、主語においては、「は」と「が」とゼロ助詞が副助詞的機能の間で交替しているとも捉えることができ、格助詞と副助詞との間に一種のパラディグマティックな関係を認めることができるだろう。Thu Thu Nwe Aye(2016)では、本論文で考察した日本語とビルマ語における助詞を全て格助詞と見なして考察した。しかし、本論文では、一部の格助詞について、副助詞と共通する機能を示すことがあることを考察し、その内実は異なるものの、日本語においてもビルマ語においても、格助詞と副助詞は連続的な側面を持っているということを明らかにした。

最後の第7章では、全体のまとめと結論について述べた。本論文では、日本語にもビルマ語にもゼロ助詞が存在するが、前者のゼロ助詞は副助詞であり、後者のゼロ助詞は格助詞であること、日本語とビルマ語の有形の格助詞には副助詞の機能を持つものがあること、当該の助詞が副助詞として機能しても、ビルマ語では（格助詞に後続する場合を除き）格助詞的な側面も失っていないことを論じた。これらの考察から、日本語とビルマ語の格助詞と副助詞には、連続的な側面があると結論づけた。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　Thu Thu Nwe Aye　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	岸　田　泰　浩
	副 査	教授	三　原　育　子
	副 査	教授	今　井　　忍
	副 査	慶應義塾大学・教授	加　藤　昌　彦
	副 査	東京外国語大学・教授	澤　田　英　夫

論文審査の結果の要旨

審査対象論文は、日本語及びビルマ語（口語体）で格助詞あるいは副助詞と目される中にあって両方の機能を備え持つ一連の助詞を研究対象として扱った対照言語学の領域に属する研究である。格助詞と副助詞の機能の連続性という観点から両言語における各々の振る舞いに着目し、当該の助詞の位置づけについて論究したものである。提出された論文は、対照言語学の領域に留まらず、特にビルマ語について興味深い言語事実を新たに見出しており、ビルマ語の研究としても高い学術的価値を認めることができる好論文である。

対象論文は七つの章から構成されており、第１章で問題の所在と研究目的を記し、第２章は日本語及びビルマ語における格助詞と副助詞に関する先行研究の概要を過不足なく提示している。

第３章では、日本語とビルマ語における格助詞と副助詞の基本的特徴を比較し、両言語の類似点や相違点を明らかにした。日本語では「格助詞－副助詞」だけではなく「副助詞－格助詞」の順も可能であり、従来、ビルマ語でも同様とされることがある点についてはそれを否定し、「格助詞－副助詞」の順のみが許容されることを指摘した。

第４章では、日本語とビルマ語で格助詞を伴うべき名詞が格助詞を伴っていない場合に現れるゼロ助詞について論じている。対象論文は、日本語のゼロ助詞に関する先行研究の議論を踏まえ、それが対比性のない主題を表す助詞、つまり、とりたて機能がない副助詞であると認定した。一方、ビルマ語では、ゼロ助詞が日本語よりも頻繁に使用される。しかし、それが格助詞であるか副助詞であるかは明確にはされていなかった。対象論文は、格助詞-nE.（具格）が省略される、つまり、ゼロ助詞と交替する現象について、その交替の可否が動詞の意味や構文と強く関わっていることを明らかにするとともに、ビルマ語のゼロ助詞が格助詞であると結論づけた。従来、省略されることがないとされていた-nE.がゼロ助詞と交替する現象が存在することを指摘したことに加え、様々な視点から緻密に分析して得た結論には説得力があり、執筆者の研究能力の高さを窺わせる。

第５章は、ビルマ語における格助詞交替と副助詞の関係について考察が施されている。日本語同様、ビルマ語でも格助詞の交替現象が観られるが、通常、-ka.（主格助詞）と-ko_（対格助詞）の交替は許されない。ところが、-ka.と-ko_の交替を想起させる例が存在する。これについて、対象論文は、当該の-ko_はそもそも格助詞ではなく、副助詞であると主張する。ビルマ語の-ka.と-ko_は格助詞としても副助詞としても存在し、その初頭音が有声化するかどうかに音韻的な条件が関わることはこれまでも知られていた。しかし、-ko_の有声化の有無が当該助詞の機能、より詳しくは、格助詞の機能を果たすか、それとも副助詞の機能を果たすかに依拠する場合があること、そして、-ko_が後接する名詞の末尾が下降調になるか否かも同じ理由に依ることを対象論文がはじめて実証的に詳らかにしたのは注目に値する。問題とされた-ka.と-ko_が交替しているかのような例において、-ko_は有声化せず、従って、副助詞であると認定され、この現象は格助詞同士の交替ではないということの正当性を証明した。さらに、ビルマ語でも「格助詞－副助詞」に加え、「副助詞－格助詞」の順が存在することを示す例として一度ならず言及されてきた-ka.-ko_と-ko_-ka.について、-ko_の有声化の有無等を根拠にそれらが副助詞の連続であり、ビルマ語では「格助詞－副助詞」のみが可能であることを論証した。

第６章では、格助詞と副助詞の連続性に焦点を当てた議論が展開されている。副助詞の-ka.と-ko_は有形格助詞には自由に後続できるが、名詞に直接後続する場合は、その生起が制限されることを明らかにする。副助詞の-ka.は対象に何らかの結果をもたらす動詞の目的語に限定されて用いられ、また、副助詞の-ko_（と-ka.-ko_及び-ko_-ka.）は状態性の述語の主語にしか接続できない。いずれも、その生起には動詞との意味関係が深く関わっており、その点では格助詞の特性に通じる面があり、名詞に直接接続する-ka.と-ko_は副助詞として十分にその地位を確立しているとは言い難いと主張する。一方、日本語においても、いわゆる総記の「が」には排他や限定の機能が認められるが、それはとりたての一種であり、格助詞「が」が副助詞の特性を帯びていることを示している。さらに、主語に現れるゼロ助詞は、対比的な「は」及び排他的な「が」と意味的に対立する関係にあり、三者は副詞的機能の間で交替していると捉えることで、格助詞と副助詞との間にパラディグマティックな関係を認めることができると論じている。これらの考察を通じ、対象論文は、日本語においてもビルマ語においても、格助詞と副助詞の機能を兼ね備えた助詞が存在し、それは２種の助詞の間に連続性があることを示していると結論づけた。最後の第７章では、論文の主な主張点がまとめられている。

第４章から第６章において明らかにされたビルマ語に関する新しい知見は特筆すべき学問的貢献であり、対象論文の独創性と斬新性を示すものである。同時に、それらは、日本語とビルマ語における格助詞と副助詞の連続性を究明していく過程において浮き彫りになったものであり、対照言語研究という視座がそれに大きく寄与したことも指摘しておくべきであろう。他方、日本語については、新たな視点からデータを分析し直そうとする試み、例えば、「は」と「が」とゼロ助詞の関係を一種の交替現象として再解釈する試みは興味深いものの、その論証は十分になされたとは言いがたい。とはいえ、膨大な研究蓄積がある日本語について、ビルマ語に比肩する新たな言語事実が連ねられていないからといって、対象論文の学術的価値が損なわれるものではなく、格助詞と副助詞の体系を連続性という観点から考えるというアイデアのもと日本語とビルマ語の対照研究をさらに一歩前進させた点は高く評価できる。論証が弱い部分が残されてはいるものの、提示された言語事実や分析の方向性は示唆に富むものであり、今後、研究の発展が期待できる意欲的な論文である。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。